

<Book Review>

*Researching Real-World Problems  
-A Guide to Methods of Inquiry-*

By Zina O'Leary

London, U.K., Sage Publications, 2005, Pp.xi, 300.

£65, \$130, hard; ISBN 1-4129-0194-9.

£20.99, \$46.95, paper; ISBN 1-4129-0195-2.

来栖 正利\*

Masatoshi Kurusu

### はじめに

素朴な疑問を出発点として、より多くを知る、または正確かつ詳細に理解するという行為を研究することと定義づけることができるならば、その方法や手順を幾通りかに標準化できるだろう。研究スタイルを標準化することのメリットは、(1)いったん標準化された研究スタイルを身につければ、その気になれば誰もが実行できる、(2)その「共有知識」に基づいて、多様な研究を適切かつ正確に理解できるようになる、そして、(3)その成果をより多くの人々が共有できるということである。

なぜ研究するのかという質問に対して、少なくとも三つの解答を提示することができる。一つは、人間の本能に起因する。知りたいという欲求は、知ろうという行動を生み、知識の獲得をもって結実する。一つは、教養を高めるためである。より豊かな人生を謳歌したいと考えるならば、無知が割に合わないことを人間は知っている。もう一つは、より豊かな人生の実現を妨げている障害を克服するためである。一見すると難攻不落な問題が、人間の英知とたゆまぬ努力を通じて、氷解する確率を高めることができる。

政策に反映させることを意図して実施される研究の実施を念頭に置きながら、その実施手順とその意味を論じた書籍の紹介と評者の感想を述べることが本書評の目的である。解決すべき課題の多様さが研究スタイルの多様さを生み出したと考えることができるものの、多様な研究スタイルの根幹をなす考え方なり思想に関する共通認識を得ることが、それほど困難なことではないと思われる。この点を本書評が取り扱う書籍を通じて理解することができるだろう。本文の内容を紹介するために次節を設け、読後感として評者の感想を最後に述べて結びとする。

---

\*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

## I. 構成

### I-1. Part 1.

無数の問題で我々を悩ませている日常生活は、常に学習、変化、改善、そして進化している。日常生活は日常生活ならしめるために日々、問題の解決を指向している。この過程において、研究とは、ある特定の問題に答えるためのデータを収集する過程といえる。したがって、研究を行うには、意思決定を容易にする、つまり、問題解決を促進する、体系だった知識が必要である。

研究することの具体的な意味は次の通りである:ある特定の問題に対して(1)何を我々はなすべきか(問題の把握)、(2)何を我々にはできるのか(解決策の模索)、(3)どのように我々を行うのか(解決策の実施)、そして(4)どの程度、我々はいままで成し遂げてきたのか(評価)を裁定する。研究は、現実の複雑多岐にわたる問題の中からある特定の問題を取り出し、理解する、問題解決に向けた「手がかり」の役割を果たす。

### I-2. Part 2.

問題のない世界を進歩や進化を引き起こす必要のない世界と考えることは生産的ではない。むしろ、変化を引き起こすのが問題であれば、それを、可能性の世界を拓ける機会ととらえることの方がより生産的である。では、問題と見なすには、ある論点を浮き彫りにするさまざまな現実と洞察を考察し、期待されている指針を研究者は提示できなければならない。

現実に存在する問題を研究することについて誰もが認める特徴は、研究することの意味が、ある問題を解決すること、またはある状況の改善を容易にするという目的に求めることができる場合である。現実に存在する問題を研究するということは、本質的に、実践的な営みなのである。したがって、研究に携わることを通じて影響を与えることができる問題こそ研究に適した問題なのである。

研究する必要が明らかな問題へとあなたを誘うのは、多くの場合、あなた自身の洞察であり経験なのである。他方、学説の探求もまた研究可能な問題を見いだす積極的な思考方法である。学説の論理的飛躍なり抜け落ちた部分を見いだすことができれば、これらを埋める作業の出発点とした研究テーマを設定することができる。これらの身近な問題に端を発して、広義の社会的または政治的政策に結びつく問題となる。

上述のことは、問題を一筋縄で解決することが一般に困難であることを意味する。したがって、研究者は問題を解きほぐし、その中に潜むさまざまな仮定を見いだすことが必要である。そのさい、自分自身の主観や行動規範を理解すると同時に多様なそれらが存在することをしておくべきである。これらの作業を経て、研究に適した問題から研究課題へと置き換えるのである。

研究課題を設定する理由は、研究を行う過程で論理的に首尾一貫した意思決定を行い、真理に到達するためである。研究課題は(A)探究すべきことを明確にする、(B)どこまで解明する必要が

あるのかという研究の範囲を規定する、(C) 研究という探求の旅を方向づけてくれる、そして(D) 研究を評価する準拠の役割を果たす。

研究可能な課題を準備すれば、次に行くことは研究の進め方を決めることである。その手始めに行う研究のための読書は、人々が感化する知識を産み出す研究過程の基本をなす。研究のための読書は、あなたの思考を基礎づけ、発展させてくれる。研究のための読書の意義として次の点を指摘することができる：

- (1) アイディアを明確にし、関連する背景知識を拡充してくれる。
- (2) あなたが実施しようとしている研究の社会的および科学的意義を論じることができる。
- (3) あなたの考えていることを理論づけて伝えることができる。

研究のための読書は研究過程のすべてを教えてくれる。他の研究との関連性や要点を把握するために学説を概観することは、効率的な研究を行うために必要なことである。加えて、しっかりとした学説研究は、しばしば研究費を獲得するために必要な研究計画書を作成するさいに求められる作業である。ただし、良い学説研究を行い、かつ書くことは簡単ではない、というのは、多くの研究目的を検討し、適切な内容に基づいて論理的な構成を組み立て、かつ説得力ある論証を展開しなければならないからである。具体的に学説研究を行うことの意義を列挙したい。

- (a) 選択した研究テーマを含む研究分野の発展状況を読者に伝えることにある。学説体系を構成する最先端の研究成果、関連研究や理論の考証、そして方法論を読者に伝えるべきである。
- (b) 研究を行うあなたの信頼性を高めることにある。学説研究には研究成果の厳密かつ客観的な評価、重要な研究課題の的確な理解、そして選択した研究課題の正確な位置づけの提示を含む。そして、
- (c) あなたが計画した研究を実施する必要性と目的適合性を論証することにある。先行研究の蓄積に基づいて、研究課題を設定し、実施しようとしていることを論証しなければならない。

研究課題に関連づけられた目的は、最適な方法論を選択するさいの重要な決定要因になる。つまり、研究課題を理解することは問題の背景を多角的に理解することを意味する。研究目的への到達は実践可能な「解決策」の発見を意味し、研究の実施を通じた知識の産出以外の研究目的を念頭に置いている。これは実務の改善や現状を変えることである。以上から、研究課題に基づいてデザインされた方法論が研究課題と首尾一貫すれば、データの収集と分析に最適な実施手順を次に考えるのである。

研究課題に対する「解答」を持っている人をどのように探し、かつその人からどのようにして情報を収集するのかということは、信頼できるデータを集めるための基本的なことである。そのさい、ある特定の状況または事例の包括的な分析や記述の諸要素を研究することを事例研究と呼ぶ。ある母集団を代表するわけではないものの、事例は理論の導出および/または既存の理論を補強する有効な方法論になり得る。

事例を選択するさいに考慮すべきことは三つある。(1)対象となる事例を定義づけること、(2)定義に見合う事例を厳選すること、そして(3)事例が内包する限界を把握しておくことである。他方、次の事例の属性を考慮した研究は、実り多い研究成果をもたらす：(a)理論と実践の融合した事例であること、(b)関連する命題を容易に導出または支持できる事例であること、そして(c)研究者の関心を喚起する事例であること。

情報提供者は有益な情報提供者になり得る。したがって、情報提供者自身が内包している役割を考慮した上で適切な情報提供者を選ぶ必要がある。例えば、

- (A)さらに有力な情報提供者の存在を考慮すること、
- (B)その情報提供者の立場を考慮すること、そして
- (C)情報提供者の倫理的責任を尊重することである。

これらを考慮した上で収集する情報は、研究課題に対する適切な「解答」になることに加えて、研究成果の説得力をさらに改善する。

サンプル選択の目的は三つある。(1)母集団の特性を十分に反映するサンプルを選択すること、(2)望ましい分析を行うことができる十分な規模のサンプルであること、そして(3)研究者が十分管理できるサンプル規模である必要がある。定性分析は大規模のデータ数を必要としない一方で、定量分析は十分かつ適切なサンプルデータを確保する必要がある。必要とされるサンプル数を決定するための公式は次式である<sup>1)</sup>： $n = [(K * S) / E]^2$

そして最後に、現実妥当なサンプルサイズを決定するさい、念頭に置くべきことが二つある。一つは任意にサンプルを選択する方法である(random samples)。これはデータが公平に選択されること、および母集団を反映している「代表値」を統計処理することに依存している。しかし、任意にサンプルを選択するには母集団のことが既知であること、および選択されたデータが母集団の一部であることが必要である。

もう一つは、意図的にデータを選択する方法である(non-random samples)。研究者が意図した代表値を選択し、想定した研究結果を得るためにはデータの収集方法を厳選しなければならない。なお、この方法で選択したデータが代表値でない可能性があるため、統計処理上の評価が困難になる問題がある。したがって、作為的にデータを収集するこの方法は、必要とするデータが揃わないといった最後のデータ収集手段という意味合いが強い。

なお、データの収集方法は多様であり、万能ではあり得ない。しかしながら、これらの方法は研究全体に含まれる厳密かつ体系だった手続きに基づく必要がある：

- (A)研究内容を十分考慮したデータ収集法であること、
- (B)有効なパイロット・テストを実施していること、
- (C)パイロット・テストの結果に基づいて適切な修正を施していること、
- (D)細心の注意を払ったデータの本格的な収集、そして

(E)適切なデータの管理と分析の実施である。

例えば、サーヴェーはアンケートを通じて個人から情報を収集する方法である。この収集方法は定性および定量分析に適したデータを提供してくれるものの、データの信頼性を確保することが困難である。インタビューは様々な質問を行い回答者の情報を収集する方法である。この方法はデータを標準化、定量化、そして質的データへと加工できる。しかしながら、収集データが内包する主観性を制御できないという課題がある。

観察によるデータ収集方法は、研究者の五感に依存するデータ収集方法である。この方法は被験者の行動に関する諸反応というよりも実際の行動を読みとって研究者がデータを収集する方法といえる。観察によるデータ収集方法は手軽なデータ収集方法と解釈される傾向があるものの、厳密に取り扱う必要がある。というのは、研究者の世界観によって、観察によって収集したデータの属性が変化する可能性を排除できないからである。

実験は従属変数に影響を与えるのか否かを理解するために、独立変数を操作して両者の因果関係を検証する。純粋な実験を行うには条件付けた実験環境を設け、任意のコントロール・グループと称するデータ群と分析対象であるデータ群とを用意する必要がある。実験の強みは：(1)因果関係を特定できる、(2)現実の行動と反応を探究できる、(3)純粋な(実験)結果を得やすい、そして(4)言語データと非言語データとを収集できることである。

なお、次の点を検討すべきである。(a)独立変数および/または従属変数を操作することによって被験者にどのような影響を与えるのか。(b)実験目的を明らかにした上で、被験者が実験に参加してくれるか否かである。(c)被験者が実験に最後まで参加してくれるか否かである。(d)実験を行う研究者のバイアスを自分で制御できるか否かである。そして(e)実験デザインが諸変数に与える影響をどの程度制御できるのかという問題である。

もちろん、現実の世界に即した因果関係を検証したいという観点から、実験環境を制御せずに、実験を実施することができる。したがって、実験という方法論に基づいた因果関係の探究は、実験環境を現実の世界に近づけるということ、および制御した実験環境とのトレード・オフという問題を常に内包している。これらのトレード・オフを勘案しながら、実験という手法がもつ強みを最大限に生かして因果関係を検証することが有益である。

### I-3. Part 3.

現実の世界で生じている問題を解決するには、問題に取り組む前に問題を理解しなければならない。証拠に基づいた意思決定を容易に行うために必要な、信頼できるデータを収集することが研究する目的なのである。研究とは既知の事実、つまり知識の体系、に補足する作業とも言える。したがって、知識の体系である学説のレビューは「より多くを見いだす」ためのあなたの焦点をより明らかにし、かつ絞り込むことに役立つはずである。

問題を理解するさいに直面する第一の課題は、あなたが設定した問題のどの側面を、研究を通じて、さらに探究する必要があるのかを正確に知ることである。第二のそれは、あなたの研究が選択すべき最も適切かつ有益な方法論上のアプローチの決定に役立つという文脈に則って、より多くを見いだすための問題を設定することである。

では、前述の二つの事項をどのように行うのか？研究を実施するにつれて検討に値する事項は、研究成果の信頼性を担保した上で、あなたの研究を進めていく過程において到達するだろう研究成果の範囲、深さ、そして水準である。言い換えるならば、研究を実際に進めていくにつれて分かることは、研究成果が「素描(quick sketch)」から「詳述(detailed portrait)」までのどこかに落ち着くということである。

適切な方法論を決めるヒントは二つある。第一は、研究課題は研究対象である母集団が生み出したデータに着目しているのかということである。これは母集団を構成する多くの要素の経験、態度、意見の探究を通じた問題分析のことである。例えば、次のような研究課題の様式になる：(a)問題の性質は何か、(b)誰が影響を受けるのか、(c)いつ、どこで問題が生じるのか、(d)問題発生の原因は何か、そして(e)どのような結果が生じるのか。

第二は、研究対象である母集団そのものを研究することである。この方法論はさらに二つに分けることができる。一つは、既存の証拠を再検討する、つまり、既存のデータを探究し、解答を求めようとすることである。もう一つは、主要なデータを収集することである。つまり、研究対象である母集団からデータを収集し、解答を導くことである。なお、主要なデータが入手できない時はサーヴェーを行う。

現実の世界で生じている問題を研究する目的は解決策を探究することである。綿密に計画された研究は、通常、次の三つのステップを踏んだ上で実施に移される。

- (A) 研究成果の享受者は誰か：これには研究を実施する必要性の評価、得られる解決策と今後の見通しを立てること、そして研究成果の活用後、つまり、問題の解決後の状況を問うことを含む。
- (B) 研究課題に関連する既存の研究成果の再検討：類似する方法論や正しい代替策を評価すること、興味深く、かつ独創的な方法論を洗い出すこと、そして無事成功した研究課題や中断された研究課題を探求することである。
- (C) 研究課題の実践度と実行可能性の評価：ある特定の解決策が研究計画に照らし合わせて有効か否かを評価することである。これは得られるだろう解決策が適切なそれか、その解決策が有効であるか、そして研究成果の享受者が受け入れてくれるそれであるかを評価することである。

現実の世界を研究する根本的な目的は、現実の世界を実質的に改善し得る貢献を行うことである。しかしながら、大半の研究がとるアプローチは、研究成果の活用を知識の産出に留めたままである。そうではなく、ある問題を解決するさいに関連する、証拠の裏付けがある意思決定ができるように、その鍵となる知識を産出することこそが研究を実施する目的なのである。

現実の世界を絶えず改善し続けることは、社会を管理する具体策の一つである。これを実現するために現実の世界を研究するのである。知識を産出することと継続的な社会の改善を指向する体系的なアプローチとを関連づける作業が現実の世界を研究することなのである。しかしながら、この方法論の限界は、持続的な社会の改善を実現しながら、しっかりした研究を実施し続けることができる枠組みを構築することの困難さである。

前述の二つの目的を満たし得る枠組みの一つが実践研究(action research)である。これは、現実生じている問題に取り組み、研究成果である知識とそれを現実社会に応用するという実践の相互作用を包括する研究方法である。つまり、研究過程、研究成果、そしてその現実への応用が相互に関係を持っている。したがって、この方法論の強みと弱みを理解することは、研究対象に対して当該方法論が適切であるか否かを定めることを意味する。

実践研究の実施によって現実の社会が変化し、それにもなつて新たな状況が生まれる。この状況が意図したものであるのか否か、および/または望ましいものであるのか否かを問わず、変化は何らかの結果をもたらす。この結果の性質を理解することが評価研究を実施する主たる目的である。評価研究を実施することによって、(1)研究成果が社会に与える影響を理解すること、(2)その影響を修正すること、そして(3)社会を改善することができる。

評価研究を、一般的に、二つの種類に分けることができる。一つは、生じた結果そのものを問うために実施される評価研究である。この評価研究で設定する典型的な問いは、「それは機能したか」と問うアプローチである。もう一つは、生じた結果の過程を問うために実施される評価研究であり、「どのようにして改善できたのか」というのが一般的な問いかけである。言うまでもなく、両者を包括した評価研究もあり得る。

ある研究を実施するのは有用かつ信頼できる研究成果を生み出すためである。しかしながら、評価研究を実施する場合、その限界を理解しておくことが有益である。(A)研究成果によってさまざまな影響を受ける利害関係者が存在することを考慮すれば、評価研究は、きわめて政治的な色彩を帯びることになる。加えて、(B)評価研究の分析対象が現実の複雑な社会であるため、研究結果を明確に評価できる規準が存在し得ないのである。

#### I-4. Part 4.

現実の世界を研究するさいに直面する主たる障害がデータ収集であると一般に考える傾向がある。しかしながら、論理的かつ体系的な枠組みを設定し、創造的な方法でデータを扱い研究することの方が難しい。これを実現するために注意すべきことは次の点である：

- ①研究を実施しながら、絶えず最終目的を意識しておくことである、
- ②収集したデータを適切に管理することである、
- ③分析を実施するさい、データの特徴に応じて適切な分析手法を選択することである、

- ④わかりやすくデータを示す工夫を行うことである、そして  
 ⑤有益かつ首尾一貫した結論を導くことである。

特に、⑤の点を詳述すれば次の通りになる。結論を導くこととは、データが示していることを明確に要約し、これを研究課題と関連づけることを意味する。言い換えるならば、結論の導出とは次の事項の検討を意味する。

- (a) 最新の学説に照らし合わせて発見事項を検討すること、  
 (b) 研究の限界と方法論上の制約を加味しながら、発見事項を検討すること、  
 (c) 重要な発見事項を導き、そしてその意義と根拠を論じること、  
 (d) そのさい、簡潔明瞭な結論を導出すること、そして  
 (e) 発見事項を研究課題と関連づけることである。

研究成果を文章にするということは、研究内容とその成果を読者と共有することを意味する。したがって、文章で示した研究成果を読者が理解できるということが、研究成果を文章にまとめるさいに求められる事項である。以上から、研究成果を文章にするさい意識すべきことは次の点である。

- (1) 誰のために研究成果を文章にまとめているのか？  
 (2) 読者は何を知りたいのか？  
 (3) 読者は何を有益であると考えてくれるのか？  
 (4) 読者の期待は何か？  
 (5) 読者はどのように反応するのか？

上述の事項を意識しながら、研究成果を文章にまとめるさいに利用できる典型的なひな形を下図のように示すことができる。

読者からの質問	研究者が選択すべき論文の構成例
あなたの研究概要を述べてください。	論題 抄録 序章 ・研究課題 ・検証すべき仮説
あなたは、なぜこの研究課題を選択したのですか？	序章 ・根拠
あなたは何を実現したのですか？	序章 ・研究目的
あなたの研究課題についての予備知識が私には不足しています。	背景 ・学説研究(最新の研究成果と先行研究)



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理論</li> <li>・文脈</li> </ul>
あなたはどのように研究を実施しましたか？	リサーチ・デザイン <ul style="list-style-type: none"> <li>・方法論</li> <li>・手法</li> <li>・方法論および手法の限界</li> </ul>
あなたの研究成果は何ですか？	発見事項 <ul style="list-style-type: none"> <li>・図表</li> </ul> 議論 <ul style="list-style-type: none"> <li>・分析、解釈、発見事項の意義</li> </ul>
研究の関連性と重要性は何ですか？	結論 <ul style="list-style-type: none"> <li>・意義、重要性</li> </ul>
あなたの研究成果をどのように活用できますか？	研究成果の応用 <ul style="list-style-type: none"> <li>・推奨</li> <li>・行動指針</li> </ul>

### 読後感

本書が主に念頭をおいている研究分野は、公共の福祉に資する政策の立案とその実施後の結果に影響を与えることを意図した研究分野である。このことを念頭においた上で、研究成果の活用に関する次の指摘を評者は再度確認することができた。それは、一般的に、研究成果が政策を支持する、または論破する「手段」として活用(悪用)される危険性を併せ持っているということである。この古くて新しい指摘は、普遍の真理を追究するという研究観と研究成果の社会への還元という実践型研究のバランスをどのように考えるのかという問題に帰着する。と同時に、研究者の研究倫理の確立という問題も新たに生み出した。

さらに次のような指摘もある。それは研究のための研究が不要であるというそれである。このような短絡的な認識そのものを批判したところで有益な何かを得ることはない。このような認識をもつものの無知を批判するのではなく、研究成果をより多くの人と共有する余地が残っていると理解し、研究者の飛躍の糧と考えることの方が「大人の考え方」と言えるだろう。有形無形の研究成果の活用方法を、今以上に研究者が工夫することによって、研究成果が、直接間接、公共の福祉に確実に貢献していることを証明することができるだろう。

そのさい、研究者は次のような価値観を再考する必要があると思われる。それは、少数の専門家にだけ理解できるような論文を執筆することに価値を見いだす狭い研究観である。論文の価値をその専門性に求めること、抽象的な内容に傾注すること、そして高度(難解)であればあるほど

良い論文とすること等である。研究者が、今述べたような価値観にこだわり続ける限り、どんなにすばらしい論文を書いたとしても、普通の人たちは最初から理解できないし、また理解したいとも思わないだろう。

本書評で取り上げた書籍は、研究者が日々携わっている研究活動というものがどのようなものであるのかということ振り返ることの有用性を示唆している。具体的には、何のために、または誰のために研究をしているのかということ、今以上に丁寧かつわかりやすく社会に説明することが重要であることを本書は教えてくれている。研究者を志す学生、今一度研究とは何かを考え直したい研究者に本書の熟読を勧めたい。

## 注

1)  $n$  は必要とするサンプル数、 $K$  は望ましい信頼水準、 $S$  はサンプルの標準偏差、そして  $E$  は精度の要求水準